

若手会員の会 活動報告

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jws/welnet/>

(若手会員の会からののお知らせはホームページにも掲載しています)

日本 - 韓国の若手溶接研究者合同シンポジウム開催の報告

Report: The 2nd JWS-KWS Joint Symposium of Young Researchers

2006年4月13日(木)午後、当会は第2回日本-韓国の若手溶接研究者の合同シンポジウムを開催しました。以下に、その顛末を報告します。

日韓合同シンポジウムは、溶接学会記念基金助成活動「若手溶接技術者・研究者のグローバルネットワークの形成」プロジェクト(以下、「GNプロジェクト」と略記)からスピノフした活動です。GNプロジェクトは、当会の運営委員会メンバーが活動母体となっており、実質的には当会の活動と言えます。

GNプロジェクトは、AWF (Asian Welding Federation) が参加国の持ち回りで年2回ほど開催している会議に併せて、当会がアジア各国で海外版基礎セミナーを行おうとしたのが元々の発端でした。2004年7月に大阪で開催された第1回AWF暫定会議にて、AWF事務局長であり、かつシンガポール溶接協会の会長であるアン・チー・ペン氏 (Dr. Ang Chee Pheng) から、社団法人日本溶接協会国際活動委員会のメンバーであり、かつ若手の会運営委員会の元委員長を務めたこともある高橋邦夫氏 (東京工業大学)、当会運営委員会委員長を当時退任したばかりの森裕章氏 (大阪大学) に対して、日本の若手メンバーの間でAWF会議に花を添えるような催しをと依頼されたのが、海外版基礎セミナーのそもそもの発端です。なぜ日本の若手の会に白羽の矢が立ったのか、筆者は以下の三つの理由があると感じています。第一の理由は、溶接の研究においては、アジアの中では日本はやはり一頭地を抜いていると理解されているためでしょう。講演を

行うなら最先端を行っている日本のメンバーからという敬意の表れであると思います。第二の理由として、アジア諸国の技術向上に対して、積極的に活動している先人に日本人メンバーが多くいらっしまったことがあると思います。様々な国際協力活動を介して、日本の溶接界の先輩方が信頼を勝ち得ていたおかげでしょう。第三の理由は、若手の会が次代を担う責務があると判断されたことでしょう。さらに若手の会は、フットワークが軽く、柵が少ないために機敏に動けることを期待されたことも理由であると思います。

このようにして、フィリピンのメトロマニラでの第2回AWF会議、マレーシアのクアラルンプールでの第3回AWF会議を経て、2005年6月に韓国ソウルでの第4回AWF会議に併催するセミナーでは、過去2回のセミナー形式ではなく、日本と韓国の若手研究者が集うシンポジウム形式で行うことに決定しました。大韓溶接学会会長のパク・ドンヒョン氏 (Dr. Dong-Hwan PARK) から、大韓溶接学会にも若手の会があり、この二つの若手の会が一緒になってシンポジウムを開催してはどうかとの提案があったからです。GNプロジェクトの第一の目的として、「若手の研究者・技術者の人的交流」を掲げていましたので、この提案に異論があろうはずありません。そこで、若手の会の第3回の海外セミナーは、「第1回日韓若手溶接研究者合同シンポジウム」と題して実施されました。この第1回シンポジウムは、韓国溶接学会の全国大会の期間中の2005年6月24日(金)に開催され



図1 (左上) 第4回AWF会議参加者, (右上) 第1回日韓若手溶接研究者による合同シンポジウム, (左下) 日本からの若手研究者の講演

ました。韓国の溶接業界の方が聴講しやすいようにとの配慮のもと、実質的には全国大会の中の特別セッションのような位置付けで開催していただきました。会場はソウル市中心部の南に位置する江南（カンナム）区の三成洞（サムソンドン）にあるコエックス（COEX）です。コエックスは、展示場・会議場・ホテル・ショッピングモールや映画館、さらには水族館までが一体となった大商業施設で、日本で言えば、東京のお台場にある東京ビッグサイトとよく似た大規模な施設です。我々のシンポジウムの会場には「第1回日韓の若手の溶接研究者による合同シンポジウム」と仰々しい看板が吊り下げられており、面映い気分でした（図1）。

日本側からの参加メンバーは、川上博士（三重大学）、佐藤裕（東北大学）、高橋邦夫（東京工業大学）、森裕章（大阪大学）、筆者の5名で、全員が大学教員でした。これに対して、韓国側は大学と国立研究機関のメンバーが半々ほどでした。これは、溶接・接合が韓国では、魅力ある技術であることの裏づけであり、これからさらに伸びていく分野であると認識されていることの証拠であると筆者には思えました。韓国側のホスト役は釜山国立大学のキム・ミョンヒョン助教授で、シンポジウムの会場手配や若手の懇親会など様々なことに対応いただきました。韓国からの参加メンバーの発表は、日本の研究とほぼ遜色のないレベルであり、溶接分野においても韓国のレベルの急激に向上していることを実感しました。このシンポジウムの参加者は、発表者を除くと30名程度でした。大入り満員とは言えない聴衆者数でしたが、熱心



図2 第1回日韓若手溶接研究者による合同シンポジウム参加者

な質問が相次ぎ、シンポジウムの開催に関わった人間としては安堵の胸を撫で下ろすことができました。この時に、この日韓シンポジウムを毎年、日本と韓国で交互に開催することが約束され、2006年度に日本で再開することを約束して散会しました（図2）。

本年2006年度の第2回目の日韓合同シンポジウムにあたっては、行きがかり上、筆者がオーガナイザー兼ホストの役目を務めることになりました。第1回シンポジウムと同様に、広く色々な方にご聴講いただけるように、溶接学会の全国大会の特別セッションのような扱いにする必要があると考えました。そこで、溶接学会の理事会に取り上げていただき、この席で快く開催のご承認をいただきました。小さい規模とは言え、まがりなりにもれっきとしたシンポジウムを開催しようとするわけですから、色々付帯業務はつきものです。日本からの参加



図3 第2回日韓若手溶接研究者による合同シンポジウムにおいて講演するパク・ヨンド助教授。



図4 第2回日韓若手溶接研究者による合同シンポジウム参加者

者を募集したり、発表が決まった方々へ様々な連絡を行い、発表予稿を集めたり、あるいはシンポジウムの開催をあちこちでアナウンスしたり、はたまたシンポジウム会場付近に掲示する大型ポスターを制作する（韓国で開催したときのような立派な看板を制作する費用がないので、筆者が所属する学科の印刷機を利用して自作しました）などのこまごまとした用件がありました。これらをこなしているうちに、あっというまに開催当日となりました。

第2回の詳細なプログラムは、本年3月号（第75巻第2号）の本欄に記載していますので割愛します。韓国側の取りまとめ役は、前回のキム氏に代わって、東義大学 (Dong-Eui University) のパク・ヨンド助教授です（図3）。キム助教授と同じようにアメリカに留学経験がある方で、長身細身のインテリ風ですが、とてもくだけていて親しみやすい人柄でした。韓国側は第1回のメンバーを総入れ替えして、民間企業に所属している方も2名ご参加いただきました。日本の方はというと参加メンバーがなかなか集まらず、三重大学の川上氏と東北大学の佐藤氏に再度ご登板いただくことになりました。また、初参加の長岡科学技術大学の宮下幸雄助手が長岡工業高等専門学校に助教授として栄転したため、都合が急遽つかなくなり、共著者であるラッタナ・ボリステクル氏に発表者

を直前になって交代するドタバタもありました。シンポジウムへの参加者は、発表者を除くと30名ほどで今回も大入り満員とはいかなかったのですが、前回同様に熱心な質疑応答が繰り返され、主催者の1人としては十分に満足のいくシンポジウムが開催できたと自負しています（図4）。

筆者は、このGNプロジェクトを介して、溶接にかかわる若手の研究者や技術者の人的交流や夢のある新しい研究の萌芽となるプラットフォームを構築することを目指しています。この日韓合同シンポジウムは、その大きな第一歩になると大きな期待を寄せています。

GNプロジェクトからスピナウトした企画として日韓合同シンポジウムの2回目を開催することができたことは、様々な方から有形無形のご援助をいただいているおかげです。溶接学会の理事の皆様、全国大会運営委員会の皆様、学会事務局、さらにはGNプロジェクトの主査をはじめとする今回の第2回日韓の若手研究者合同シンポジウムの開催にあたってご協力いただきました関係各位に御礼申し上げます。このシンポジウムは来年以降も続く予定です。興味をお持ちの方は、是非ともご参加いただくようお願いいたします。

武市祥司（若手会員の会運営委員会委員，東京大学）